

全ての人の幸せを願って

2024年度の小中学校におけるいじめの件数は約66万件で、過去最悪を更新した。

この数字を聞き、私は酷く衝撃を受けた。この数字を少しでも減らすには、どうしたらよいのだろうか。いじめが起こった際の対応の大半は、被害者の気持ちに寄り添い、加害者を叱責するというものだ。このことを考えると、私の中である疑問が生まれた。「加害者はなぜ、いじめを行うのか?」「被害者が出る度に加害者を叱責するのを永遠に繰り返しては、各地で次々と沸き起こるいじめはなくなるのではないか?」

いじめが起こると、第三者は「かわいそう」と、被害者に目が行きがちなのが一般的である。私も以前までは、被害者のケアを徹底的に行うことが最善だと考えていた。それは勿論今も変わっていない。しかし、私の今までの経験を思い返すと、違う面で考えることもできることに気が付いた。

私は小学校の低学年の頃、複数の女子からのいじめを受けていた。具体的には、授業で使う教材を取られる、私物を踏まれる、ボールの代わりに蹴られる、階段から突き落とされるなど様々で、ひどい時には痣や怪我を負って帰宅することもあった。私は言い返すことができず、適当に笑ってごまかしていた。言い返したら相手がかawaiiそう、それで相手が傷ついたらどうしようという思いが強く、耐え続ける生活を送っていた。時折、学校に行きたくないという思いもあったが、当時の私は「いじめ」という存在を知らず、この状況は普通なのだと思います。学校に行くことも普通のことなのだからと、休むことなく通い続けていた。今思い返してみれば、私が学校に通い続けることができたのは、家族の支えがあったからだと思う。当時の私は気弱で、何でも相手に合わせる癖があった。家族の支えがなければ、今こうして休まず学校に通えていることもなかったかもしれない。幸い、学年が上がるにつれ、いじめは無くなっていった。そうすると、心にゆとりが生まれ、私をいじめていた苦手だった人達とも、普通に会話を交わすことができるようになった。そして、相手のことを少しずつ知っていくと、あることに気が付いた。その人たちの多くが、家庭内の環境や、周囲との関係性において、満足していないという共通点があったのだ。調べてみると、一人になりたくない、愛されている実感がないという感情が、不満やストレス、他人への嫉妬心になり、いじめをしてしまう傾向にあることがわかった。

私たちは小さい頃から、「他人を傷つけてはいけない」「人権を守ろう」と教わり続けてきた。人権とは、誰もが生まれながらにして持っている、人間として幸

せに生きていくための権利である。これを聞いて私は思った。いじめを行う者は、幸せに生きていく権利「人権」が与えられていないのだ。それが自身への不満やストレスを引き起こし、他者を傷つけてしまう。そして第三者が被害者に同情することで、加害者はさらに孤独になり、再び人を傷つける。それが負の連鎖となり、いじめを繰り返してしまうのではないか。

勿論、いじめをする人に同情しなければならないという訳ではない。そこにどんな理由があっても、人を傷つけることは、決して許されることではない。しかし、被害者だけではなく、加害者にも目を向けることで、いじめの原因を探り、いじめを減らすことにつながるのではないか。なぜ人を傷つけてしまったのか、加害者の心の内に秘めている想いは、周囲に助けを求めているものなのかもしれない。私も実際にいじめを受け、加害者の行動に疑問を抱かなければ、加害者の裏にあった気持ちに気づけなかったかもしれない。

中学生になった今、昔私をいじめていた子たちとも、仲のよい友人になっている。だからこそ私は、加害者を含めた全ての人々が、本当の幸せを手に入れられる社会を作りたい。それが、自分も他人も大切にする、全ての人の人権を守るために必要なことなのではないだろうか。